

敬老の日に

市川茂子

若い頃には、母の日になると身内の者や近所の親しい方々から、プレゼントの品や花束・花籠などが届いて、せまい部屋に並べて楽しんでいた。

途中からは、敬老の日と合せて年に二回もいただくようになった。その都度、何の役にも立っていないのに、今まで充分にいただいたから、もういいよと断っている。

次の年になると、また同じように届けてくれる。二十年、三十年と心変わりなく思いを寄せてくれることはうれしい。母の日、敬老の日を問わずに、折にふれて旅行のお土産や、手作りのごちそうを持って来てくれるので、身近に居る方々の真心に感謝しながらの日々に、また敬老の日と言われると、面映くなるほど、年を重ねてしまった。

以前から、敬老の日は九月十五日と思っていた。いつも世話になっている看護師長と、その一人娘が母と同じ病院の看護師になっている。先日、彼女のお母さんから、私の大好きなお菓子とお茶のお土産をいただいたので、敬老の日の気持も込めてくれたと思っていた。

今年も九月十八日が敬老の日になっていることなど気に留めていなかったが、十八日の夕方に仕事帰りの彼女があわただしく駆けこんできて、ばあちゃんの好きな色の花を選んでたと言って、赤むらさきの大輪のダリアに、しぶい色の小さなバラとワレモコウをあしらった、目の覚めるような美しい花束を持って来てくれた。

テーブルに置いて、記念写真を撮ることになって、彼女が急いでいるようなので、キャップをかぶったままで一枚写したら、なんとも見栄えの悪い顔になった。

前もって電話してくれたら、身繕いして待っていたのと言いなから、以前に彼女が買ってくれた、むらさき色のキャップの替りにもなるような帽子を取り出してかぶり、何とか格好つけて写してくれた。

休みの日になったら、ゆっくり話しに来るから、ばあちゃんは元気で居るようと、言い残して帰っていった。

多忙な時間を縫って、敬老の日に来てくれた彼女のやさしい気持が愛おしく胸が熱くなる。

明日からまた、花を眺めながら、楽しい思い出に耽って、年を重ねる日々になりそうだ。